

地域戦略研究所紀要

第4号

北九州市民の飲酒動向と飲酒に対する意識調査

深谷 裕 …… 53

北九州市立大学
地域戦略研究所
2019.3

北九州市民の飲酒動向と飲酒に対する意識調査

深谷 裕

- I 研究の目的と背景
- II 方法
- III 結果
- IV 考察
- V まとめ

〈要旨〉

アルコール飲料の消費低迷は、地域経済や街の雰囲気にも芳しくない影響を及ぼす反面、高齢者による飲酒問題やそれに伴うトラブルも報告されている。本研究では、北九州市民の飲酒傾向や、飲酒に対する認識および許容度、飲酒によるネガティブな経験について、インターネットによるアンケート調査により明らかにした。回答者の8割以上が「ほとんど毎日」飲むが、飲酒習慣のある回答者の8割が「家飲み」であることや、女性の飲酒に対しては男性が飲酒することよりも、比較的否定的にとらえられる傾向があることが明らかになった。

〈キーワード〉 アルコール依存、高齢者、景気、ジェンダー、許容度

I 研究の目的と背景

本研究の目的は、北九州市民の飲酒傾向や、飲酒に対する認識や許容度、飲酒による問題経験について明らかにし、今後の健康福祉施策および地域福祉施策を検討する際の知見を得ることである。

成人日本人の飲酒量は1992年をピークに年々減少傾向にある。アルコール飲料の消費低迷は、酒類製造業や販売業、レストランや居酒屋などの飲食店にとっては悩みのタネになることは言うまでもない。実際に、第3次産業活動指数でみると、ファストフード店および飲食サービス業は勢いを保てているのに対し、酒類消費が中心となる「パブレストラン、居酒屋」は長期的に低落傾向にある〔経済産業省、2018〕。また、経済産業省は「飲食」に占める外食の割合がリーマンショックにより低下し、「外飲み」より「家飲み」が増えていることを示唆している。「外飲み」の減少により経営不振で閉店を余儀無くされる飲食店が多くなれば、地域全体の雰囲気にも大きく影響を及ぼすだろう。

しかし、飲酒量が減少傾向にあると言われている一方で、飲酒運転は後を絶たない。また、高齢者による飲酒問題も看過できない。近年増加傾向にある高齢者犯罪の多くは、飲酒下での

暴力や近隣トラブル、傷害・暴行事件であることに留意すべきであろう。その背景には、地域社会での孤立や孤独による寂しさを飲酒により紛らわす習慣が付き、それが改善されていないことにあると考えられている [法務省、2008]。実際、内閣府の調べでは 65 歳以上の一人暮らし高齢者の増加は男女ともに顕著であり、1980 年には高齢者人口に占める割合は男性 4.3%、女性 11.2%であったが、2015 年には男性 13.3%、女性 21.1%に増加している [内閣府、2017]。とくに一人暮らしの男性高齢者の場合、一人暮らしの女性と比べて幸福度も低く、「一緒にいるとほっとする人がいない」という独居男性も多いという調査結果がある [内閣府、2015]。

言うまでもなく、幸福度が高くアルコールで寂しさを紛らわす必要のない一人暮らし高齢者も多くいる。しかし、アルコール依存症者に占める高齢者の割合は年々増加傾向にある [和気、2015]¹。高齢者の場合、アルコール 1 日 30g を超える飲酒量は認知症のリスクを増大させ、高齢アルコール依存症者では認知機能が低下し、脳梗塞のリスクが高まると言われている [松井、2013:118]。そもそも、加齢に伴い体内総水分量の減少やアルコール代謝の低下などにより、高齢者は若年者と比較して少量の飲酒で酩酊に至りやすい。「自分の飲酒量は多くない」と認識していても、実際には「健康日本 21」で推奨されている「節度ある適度な飲酒」量を超えて飲酒している場合もあり、知らず知らずに多量飲酒に陥っている可能性も否めない²。働いていた頃は身体的・精神的ストレスの調整弁となり一定量に収まっていた飲酒が、退職や配偶者の死に伴うライフスタイルの変容が飲酒の意義を変質させ、飲酒そのものが目的となり、逆に身体的・精神的ストレスを助長するという指摘もある [松井、2013:118]。ここまでとくに高齢者への飲酒の悪影響を指摘したが、未成年者の飲酒問題や胎児や授乳中の乳児への影響も考慮すると、多量飲酒の弊害はすべての年代に関係していると言えよう。

したがって、個人的にも社会的にも「節度ある適度な飲酒」が求められるのであるが、実際に北九州市民の飲酒動向はどのような状況にあるのか。また、全国的には飲酒量は減少しているのだが、北九州市民は飲酒をすることに對してどのように認識しているのだろうか。本研究では、市民の飲酒傾向やアルコールに対する認識、飲酒に対する許容度、飲酒による問題経験について明らかにする。本調査により得られた知見は、北九州市の健康福祉施策および地域福祉施策を検討する際の資料になると考える。

II 方法

北九州市在住の 20～80 歳の男女 412 人（男性：206 人、女性 206 人）を対象に、民間のインターネット調査会社を通して、インターネット調査を実施した。調査期間は 2018 年 9 月 14～18 日の 4 日間である。

性別、年齢、職業といった基本事項の他、飲酒頻度、飲酒場所、過去 10 年間の飲酒量の増減とその理由、飲酒に対する認識、男女の飲酒に対する許容度、飲酒による否定的な経験、周囲の人々からの注意、関係者の飲酒状況等、飲酒動向や認識を明らかにするための質問を全部で 13 項目程度している。先行研究との比較検討を考慮して、飲酒に対する認識については

表1 回答者の基本属性

年齢			世帯年収		個人年収		職業		N	%
	N	%	N	%	N	%				
12才未満	0	0.0	200万未満	32	7.8	149	36.2	公務員	17	4.1
12才～19才	0	0.0	200～400万未満	90	21.8	87	21.1	経営者・役員	7	1.7
20才～24才	28	6.8	400～600万未満	84	20.4	49	11.9	会社員(事務系)	47	11.4
25才～29才	26	6.3	600～800万未満	68	16.5	36	8.7	会社員(技術系)	37	9.0
30才～34才	48	11.7	800～1000万未満	25	6.1	9	2.2	会社員(その他)	68	16.5
35才～39才	28	6.8	1000～1200万未満	9	2.2	2	0.5	自営業	24	5.8
40才～44才	61	14.8	1200～1500万未満	7	1.7	3	0.7	自由業	9	2.2
45才～49才	58	14.1	1500～2000万未満	1	0.2	0	0.0	専業主婦(主夫)	81	19.7
50才～54才	48	11.7	2000万円以上	0	0.0	0	0.0	パート・バイト	56	13.6
55才～59才	36	8.7	わからない	35	8.5	16	3.9	学生	8	1.9
60才以上	79	19.2	無回答	61	14.8	61	14.8	その他	13	3.2
全体	412	100.0	全体	412	100.0	412	100.0	無職	45	10.9
								全体	412	100.0

1976年に余暇開発センターが使用した調査尺度を、男女の飲酒に対する許容度については、2001年に清水らが使用した調査尺度を用いた。

回答は無記名とし調査機関の登録者のみがインターネットを通じて回答できる仕組みになっているため、回答の意思がある人のみが回答しており、匿名性は担保されている。

分析にあたっては、SPSS (ver.22) を用いた。単純集計のほか、必要に応じて変数間の関連性をみるうえでの検定を行なった。具体的には性別と飲酒習慣、飲酒観、男性・女性による飲酒行為、それぞれとの関連性などを検討した。

III 結果

1. 基本属性

回答者の基本属性について表1にまとめている。年代の分布を見ると、最も多い層が60歳以上(19.2%)、次いで40歳代前半(28.9%)であり、20歳代の回答者は13.1%と最も少なかった。なお、83.7%の回答者に同居者がいた。世帯年収は200～400万円が21.8%と最も多く、次いで400～600万円が20.4%であった。一方、個人年収は200万円未満が最も多く、36.2%であった。これは、回答者の職業に、収入のない「専業主婦(主夫)」が19.7%、「無職」が10.9%と一定数含まれていることによるものと考えられる。

2. 飲酒動向

(1) 飲酒状況と飲酒開始年齢

現在の飲酒状況については、「飲めない／飲んだことがない」が14.6%、「飲めるが、ほとんど飲まない(やめている)」が35.9%、「飲む」が49.5%であ

表2 性別と飲酒習慣の関連性

	飲めない／ 飲んだこと がない	飲めるが、ほと んど飲まない (やめている)	飲む	合計
男性	23 11.2%	57 27.7%	126 61.2%	206 100.0%
女性	37 18.0%	91 44.2%	78 37.9%	206 100.0%
合計	60 14.6%	148 35.9%	204 49.5%	412 100.0%

上段：実数(人) 下段：%

表3 年代別による飲酒場所

年齢	自宅	居酒屋などの飲食店	職場	その他	合計
20-24	6	5	1	0	12
	50.0%	41.7%	8.3%	0.0%	100.0%
25-29	9	4	1	0	14
	64.3%	28.6%	7.1%	0.0%	100.0%
30-34	10	5	0	0	15
	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	100.0%
35-39	12	0	0	0	12
	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
40-44	26	5	0	1	32
	81.3%	15.6%	0.0%	3.1%	100.0%
45-49	24	6	0	0	30
	80.0%	20.0%	0.0%	0.0%	100.0%
50-54	21	2	0	0	23
	91.3%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
55-59	18	5	0	0	23
	78.3%	21.7%	0.0%	0.0%	100.0%
60-	40	3	0	0	43
	93.0%	7.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	166	35	2	1	204
	81.4%	17.2%	1.0%	0.5%	100.0%

上段：実数（人） 下段：%

とがない人も30.1%含まれていた。

(2) 普段の飲酒場所

普段の飲酒場所は全体の8割以上が「自宅」と回答しており、いずれの年代でも「自宅」での飲酒が最も多いが、30代後半、50代前半、60代以上は9割以上の回答者が「自宅」を普段の飲酒場所としていた（表3）。60代以上は回答者数が比較的多いことから（43人）、高齢者の多くが自宅での飲酒になりがちであることが推測される。

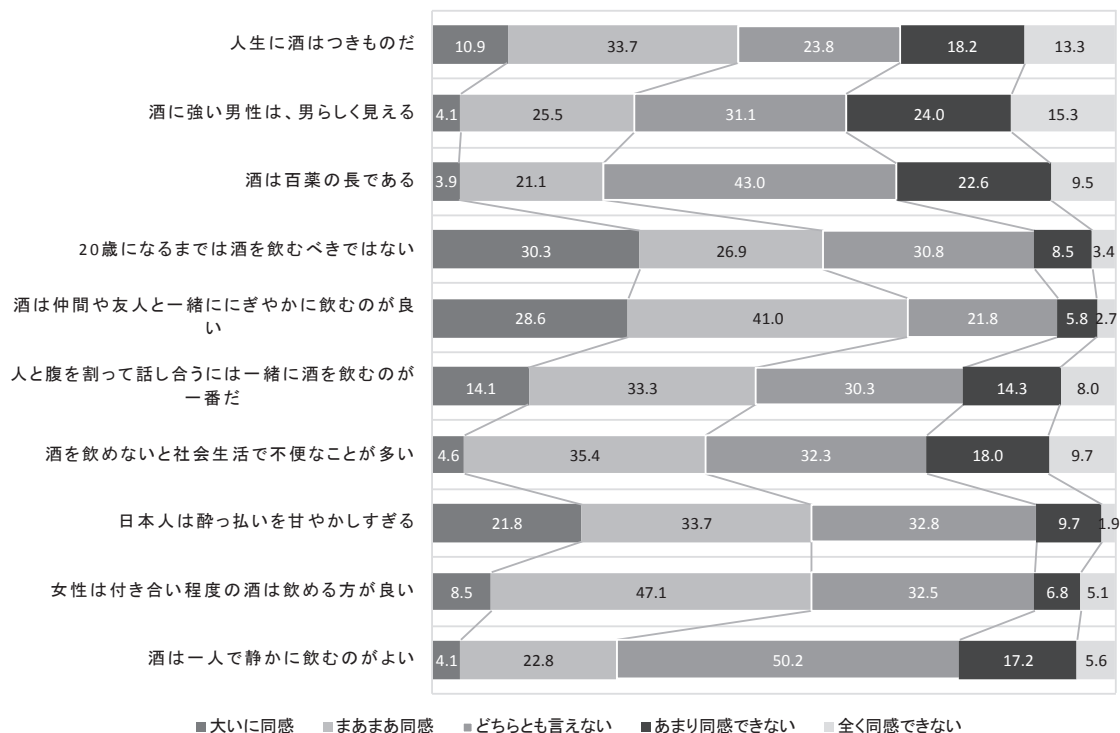
(3) 飲酒量の変化

30歳以上の回答者を対象に、過去10年間で飲酒量の増減について尋ねたところ、「減った」人が41.9%、「変わらない」が34.7%、「増えた」人が23.4%であった。表4は、年代と飲酒量の増減の関係を示したものである。50代後半を除き、どの年代でも10年前と比べて減少したと認識している人が多い。また、増減の理由を複

表4 年代別による飲酒量の変化

	増えた	減った	変わらない	合計
30-34歳	13	21	9	43
	30.2%	48.8%	20.9%	100.0%
35-39歳	8	11	4	23
	34.8%	47.8%	17.4%	100.0%
40-44歳	11	21	18	50
	22.0%	42.0%	36.0%	100.0%
45-49歳	7	21	24	52
	13.5%	40.4%	46.2%	100.0%
50-54歳	10	16	13	39
	25.6%	41.0%	33.3%	100.0%
55-59歳	10	8	12	30
	33.3%	26.7%	40.0%	100.0%
60歳以上	12	29	25	66
	18.2%	43.9%	37.9%	100.0%
合計	71	127	105	303
	23.4%	41.9%	34.7%	100.0%

図1 飲酒観



数回答で尋ねたところ、「増えた理由」として比較的多かった回答は「お酒が美味しいと感じるようになった」(17.2%)、「普段の生活でのストレス程度が変わった」(15.2%)であり、「減った理由」として比較的多かった回答は「お酒に弱くなった」(25.8%)、「体調や健康を気にするようになった」(23.7%)、「仕事の付き合いで飲むことが少なくなった」(19.2%)、「プライベートで誘われることが少なくなった」(15.7%)であった。したがって、10年前と比較して飲酒量が「減った」と認識している場合は、自分自身の健康上の理由もさることながら、社会経済状況あるいは社会習慣の変化に伴う仕事の付き合いの減少や、退職に伴う人間関係の変化もその背景にあることが考えられる。また「普段の生活でのストレスの程度が変わった」は、飲酒量が増える要因にはなっても、減る要因としては認識されにくいことが示された。さらに、仕事の忙しさの変化は、飲酒量の増減要因として認識されにくいことが示唆された。

3. 飲酒に対する認識

(1) 飲酒観

アルコールや飲酒についての認識について、「大いに同感」から「全く同感できない」までの5段階で、すべての回答者に尋ねた結果をグラフに示したものが図1である。全体的には「どちらとも言えない」という中間的な認識を示す人が多かったが、「酒に強い男性は、男らしく見える」については不同意を示す傾向がみられた。また、「20歳になるまでは酒を飲むべきではない」については、同意を示す傾向がみられた。さらに「酒は仲間や友人と一緒ににぎやかに飲むのが良い」や、「日本人は酔っ払いを甘やかしすぎる」については、「大いに同感」

表5 性別と飲酒観の関連性

		平均値	SD	t	p値(両側)
人生に酒はつきものだ	男	2.74	1.257	-2.608	.009**
	女	3.05	1.159		
酒に強い男性は、男らしく見える	男	3.31	1.059	1.870	.062
	女	3.11	1.151		
酒は百業の長である	男	3.12	1.043	-.201	.841
	女	3.14	.911		
20歳になるまでは酒を飲むべきではない	男	2.43	1.083	2.925	.003**
	女	2.12	1.073		
酒は仲間や友人と一緒に賑やかに飲むのが良い	男	2.28	1.057	3.093	.002**
	女	1.98	.878		
人と腹を割って話し合うには一緒に酒を飲むのが一番だ	男	2.61	1.115	-1.403	.161
	女	2.77	1.132		
酒を飲めないと社会生活で不便なことが多い	男	2.92	1.028	-.094	.925
	女	2.93	1.075		
日本人は酔っ払いを甘やかしすぎる	男	2.42	1.032	1.244	.214
	女	2.30	.946		
女性は付き合い程度の酒は飲める方が良い	男	2.61	.955	1.808	.071
	女	2.45	.897		
酒は一人で静かに飲むのが良い	男	2.90	.900	-1.611	.108
	女	3.04	.874		

備考：n=男女とも206

**p<0.01 *p<0.05

も多く、強い同意を示す傾向がみられた。

性別による飲酒観の相違を見る目的で独立サンプルのt検定を行ったところ、3つの質問について1%水準で有意差が確認された(表5)。具体的には、「人生に酒はつきものだ」については男性の方が同意を示す傾向が強く(p=.009)、「20歳になるまでは酒を飲むべきではない」については女性の方が同意を示す傾向が強く(p=.003)、「酒は仲間や友人と一緒ににぎやかに飲むのが良い」についても女性の方が同意を示す傾向が強かった(p=.002)。

さらに、飲酒する人(飲酒群)と、飲めない・飲めるがほとんど飲まない人(非飲酒群)に分け、飲酒観の相違を確認したところ、「酒は仲間や友人と一緒ににぎやかに飲むのが良い」以外のすべての項目で有意差が確認された(表6)。平均値が低い方が、「大いに同感」

表6 飲酒習慣と飲酒観の関係

		平均値	SD	t値	p値(両側)
人生に酒はつきものだ	非飲酒群(n=208)	3.49	1.086	11.439	.000**
	飲酒群(n=204)	2.29	1.036		
酒に強い男性は、男らしく見える	非飲酒群(n=208)	3.47	1.107	4.986	.000**
	飲酒群(n=204)	2.94	1.049		
酒は百業の長である	非飲酒群(n=208)	3.39	.926	5.723	.000**
	飲酒群(n=204)	2.86	.959		
20歳になるまでは酒を飲むべきではない	非飲酒群(n=208)	2.12	1.066	-3.070	.002**
	飲酒群(n=204)	2.44	1.088		
酒は仲間や友人と一緒に賑やかに飲むのが良い	非飲酒群(n=208)	2.13	.979	.125	.901
	飲酒群(n=204)	2.12	.987		
人と腹を割って話し合うには一緒に酒を飲むのが一番だ	非飲酒群(n=208)	3.01	1.092	6.185	.000**
	飲酒群(n=204)	2.36	1.062		
酒を飲めないと社会生活で不便なことが多い	非飲酒群(n=208)	3.05	1.082	2.467	.014*
	飲酒群(n=204)	2.80	1.004		
日本人は酔っ払いを甘やかしすぎる	非飲酒群(n=208)	2.20	.982	-3.346	.000**
	飲酒群(n=204)	2.52	.975		
女性は付き合い程度の酒は飲める方が良い	非飲酒群(n=208)	2.74	.968	4.784	.000**
	飲酒群(n=204)	2.31	.836		
酒は一人で静かに飲むのが良い	非飲酒群(n=208)	3.17	.843	4.605	.000**
	飲酒群(n=204)	2.77	.892		

**p<0.01 *p<0.05

の割合が高いことを示している。全体的に飲酒をする人の方が飲酒をしない人に比べて、飲酒をすることについて寛容な傾向がみられる。

(2) 男性・女性それぞれが飲酒することに対する許容度

① 男性による飲酒に対する許容度

図2 以下のような場面で、男性が飲酒することについてどの程度許容できますか。

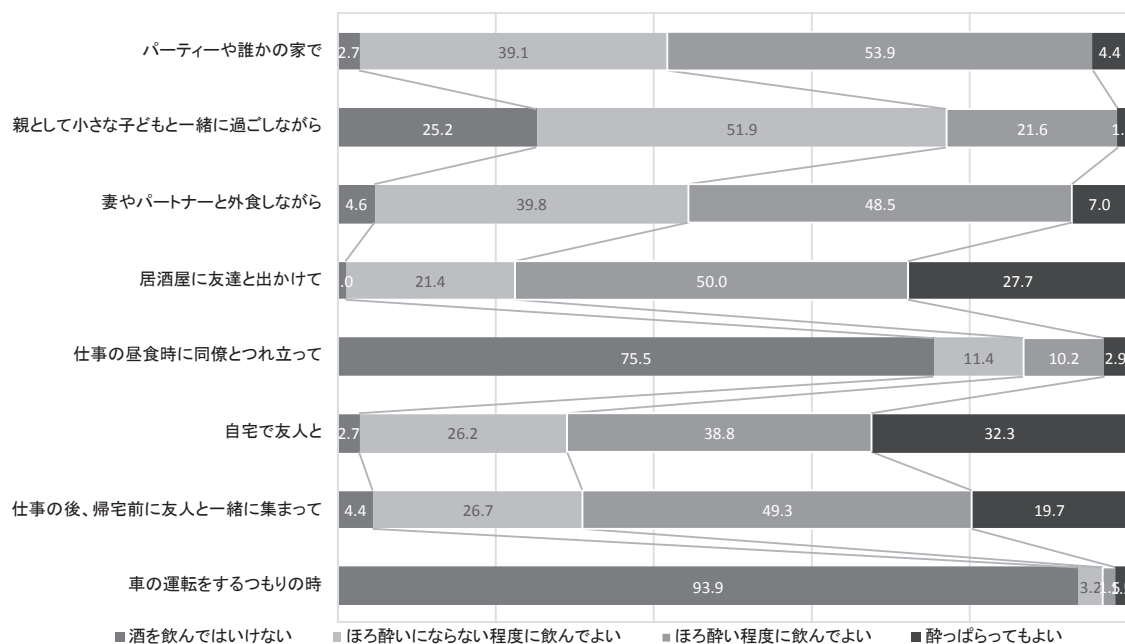
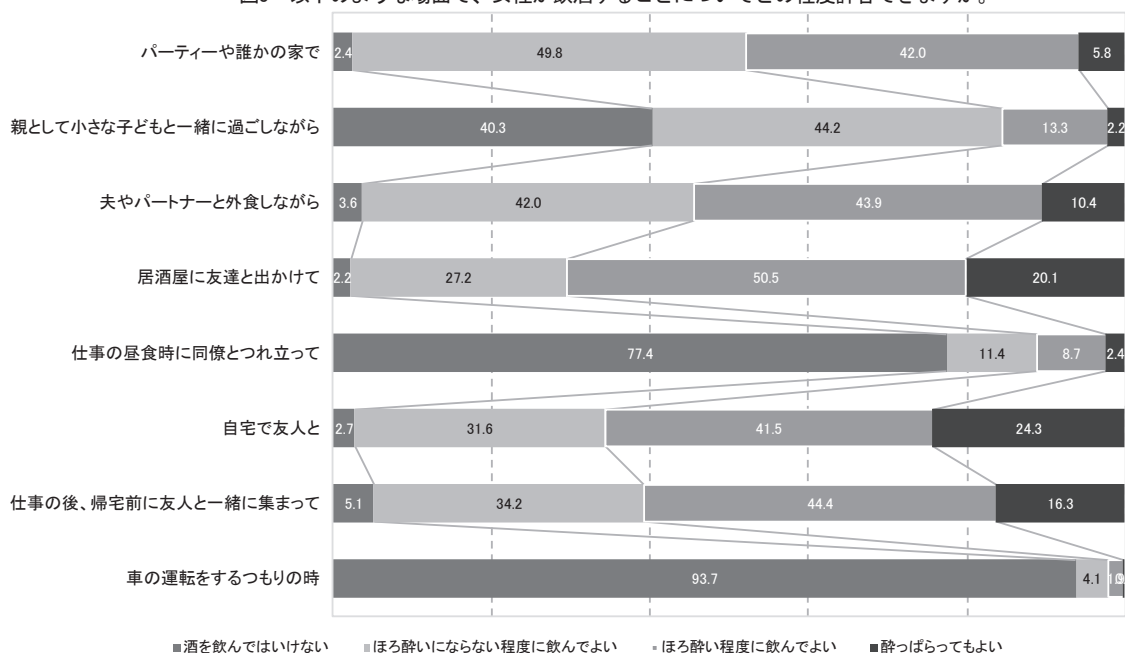


図3 以下のような場面で、女性が飲酒することについてどの程度許容できますか。



男性が飲酒することに対する許容度を8つの場面に分け、「酒を飲んではいけない」から「酔っ払ってもよい」までの4尺度で尋ねた結果が図2である。「酒を飲んではいけない」という意見が多かった上位3つの場面は、「車の運転をするつमりの時」(93.9%)、「仕事の昼食時に同僚とつれ立って」(75.5%)、「親として小さな子どもと一緒に過ごしながら」(25.2%)であった。本来、飲酒運転は道路交通法違反とされているが、車の運転をするつमりの時に飲酒を許容する回答もわずかではあるが見られる。

②女性による飲酒に対する許容度

表7 性別と許容度の関連性

男性が飲酒すること	回答者	平均値	SD	t値	p値(両側)
パーティーや誰かの家で	男	2.52	.660	-2.487	.013*
	女	2.67	.564		
親として小さな子どもと一緒に過ごしながら	男	2.06	.769	1.992	.047*
	女	1.92	.661		
妻やパートナーと外食しながら	男	2.49	.731	-2.803	.005**
	女	2.67	.637		
居酒屋に友達と出かけて	男	3.06	.791	.542	.588
	女	3.02	.658		
仕事の昼食時に同僚と連れ立って	男	1.57	.917	4.275	.000**
	女	1.24	.592		
自宅で友人と	男	2.92	.849	-2.199	.028*
	女	3.10	.809		
仕事の後、帰宅前に友人と一緒に集まって	男	2.83	.829	-.314	.754
	女	2.85	.738		
車を運転するつमりの時	男	1.19	.618	4.047	.000**
	女	1.01	.155		
女性が飲酒すること					
パーティーや誰かの家で	男	2.49	.675	-.687	.492
	女	2.53	.614		
親として小さな子どもと一緒に過ごしながら	男	1.87	.834	2.686	.007**
	女	1.67	.660		
夫やパートナーと外食しながら	男	2.57	.727	-1.093	.275
	女	2.65	.715		
居酒屋に友達と出かけて	男	2.88	.778	-.199	.842
	女	2.89	.704		
仕事の昼食時に同僚と連れ立って	男	1.51	.876	4.262	.000**
	女	1.21	.541		
自宅で友人と	男	2.76	.813	-2.833	.004**
	女	2.99	.787		
仕事の後、帰宅前に友人と一緒に集まって	男	2.69	.827	-.744	.457
	女	2.75	.761		
車を運転するつमりの時	男	1.16	.479	3.839	.000**
	女	1.02	.170		

(注1) n=男女とも206

**p<0.01 *p<0.05

(注2) 平均値が低いほど許容度は低い

女性が飲酒することに対する許容度を確認するために、男性と同様の8つの場面における飲酒許容度を尋ねた結果が図3である。「酒を飲んではいけない」という意見が多かった上位3つの場面は、男性の場合と同様に「車の運転をするつमりの時」(93.7%)、「仕事の昼食時に同僚とつれ立って」(77.4%)、「親として小さな子どもと一緒に過ごしながら」(40.3%)であった。ただし、親として小さな子どもと一緒にいるという場面設定は男女とも同じであるにもかかわらず、その際母親である女性が飲酒することに対しては、父親である男性が飲酒することによって許容度がより低くなる傾向がみられた。

③性別と男女の飲酒に対する許容度の関連性

さらに、性別により、男性・女性それぞれの飲酒に

対する許容度に相違があるかを確認したところ（表 7）、男性が飲酒することに対する許容度については、「居酒屋に友達と出かけて」と「仕事の後、帰宅前に友人と一緒に集まって」を除き、関連性が見出された。具体的には、男性の回答者の方が女性の回答者よりも、男性がパーティーや誰かの家で飲酒すること、妻やパートナーと外食しながら飲酒すること、自宅で友人と飲酒することに対して許容度が低い傾向がみられる。逆に、女性の回答者の方が男性の回答者よりも、男性が小さな子どもと一緒に過ごしているときに飲酒すること、仕事の昼食時に同僚と連れ立って飲酒すること、車を運転するつもりの時に飲酒することに対して許容度が低い傾向が見られた。

女性が飲酒することについては、4つの場面について性別と許容度との関連性が見出された。具体的には、女性の回答者の方が、女性が子どもと一緒に過ごしているときに飲酒すること、仕事の昼食時に同僚と連れ立って飲酒すること、車の運転をするつもりの時に飲酒することに対して、それぞれ男性の回答者よりも許容度が低い傾向がみられた。他方で、男性の回答者の方が女性が自宅で友人と飲酒することに対して許容度が低い傾向がみられた。

4. 飲酒によるネガティブな経験

(1)問題行動の有無

これまで飲酒が原因で、病気や別離などネガティブな経験をしたことがあるかを尋ねたところ、6つのいずれの経験についても「ない」という回答が9割以上を占めた。そのうち、「飲酒中に喧嘩になった（口喧嘩を除く）」は他の項目よりも「ない」という回答が少なく、適度な飲酒量を超えると気が大きくなったり、適切な判断力が失われ、暴力的になることがあることが推察される。

(2)他人からの注意やアドバイスの経験

回答者の9割以上が、家族や親族などの周囲の人々や医師などから、飲酒量を減らすよう（あるいは止めるよう）アドバイスを受けた経験は「ない／あてはまる人はいない」と回答していた。アドバイスを受けたことが「ある」人のうち、最も多いのが「配偶者・パートナー」からであった。

(3)周囲の人の飲酒による問題行動

一方、身近な人が飲酒により健康を害したり、仕事や家庭生活に問題を生じさせたことがあるかを尋ねたところ、「ない／あてはまる人はいない」という回答は8割～9割程度であった。12.9%の回答者は、父親が飲酒により問題を起こしたことがあると回答しており、友人については12.2%の回答者が、職場・学校関係者については12.4%の回答者が、問題を起こしたことがあると回答していた。

IV 考察

本研究では、北九州市民の飲酒傾向やアルコールに対する認識、飲酒に対する許容度、飲酒による問題経験について明らかにすべく、アンケート調査を実施した。本研究では飲酒頻度は

尋ねているが、飲酒量については具体的には調査項目に含めていないため、実際に 10 年前と比較して市民の飲酒量が減少しているか否かは明らかにできなかった。しかしながら、4 割が 10 年前と比較し「減った」と回答しており、その要因として自分自身の体調や健康をあげていることから、市民がより自身の健康について考えるようになっていくと言えよう。回答者の 8 割以上がほとんど毎日飲むが、飲酒習慣のある回答者の 8 割が「家飲み」である。昨今では家計の状況や世代間の考え方の相違を背景に、会社帰りに同僚や後輩と居酒屋に立ち寄るといったことも少なくなったと言われている。このような状況が数値として現れているとも受け取れる。一方で、「酒は仲間や友人と一緒ににぎやかに飲むのが良い」と考えている人も多く、そうは思いつつも、現実では必ずしも叶っているわけではないことが推察される。ただし、このような飲酒観は男性よりもむしろ女性の間で強い傾向が見られ、日常の出来事や困りごと、悩みごと、気持ちをアルコールを介して共有し合うことが、女性の方が得意であるとも考えられる。とするならば、最初に述べたように、高齢期に入り居場所を失い孤独な状況に陥り、飲酒そのものが目的になっていくのも、女性よりもむしろ男性に多くなるだろう。高齢者ではなくても、一般的にアルコール依存症は男性に多くことから、日常的に抱えているストレスを飲酒で紛らわす傾向が男性には強いことがわかる。

また、今回の調査では、回答者の性別により、男女それぞれの飲酒に対する許容度が異なることが示された。飲酒文化について、日本では男性には許容的で女性には厳格な態度をとるという性的ダブルスタンダードが存在することは、2001 年に実施された調査でも示されている [清水、金、廣田、2004]。近年では女性の社会進出がすすみ、また男女平等の概念も広まりつつあるが、今回の結果からは、市民の中にはお互いがお互いの性別に対して、あるいは自らの性別に対して「あるべき」観を保持し続けていることが推察される。

さらに、飲酒が日常化している人の方がそうでない人に比べて、飲酒することに対しては寛容な傾向も見出されている。このような、飲む人と飲まない人での飲酒に対する価値観の違いは、43 年前の 1976 年に実施された大規模調査の結果にも現れている [余暇開発センター、1977]。また、1976 年の結果と比べると、飲酒についての価値観は概ね同様の傾向が本研究でも見出されている（たとえば男女問わず「酒は仲間や友人と一緒ににぎやかに飲むのが良い」や、「日本人は酔っ払いを甘やかすすぎる」については、肯定的であること）。しかし、一部相違もある。具体的には、1976 年の調査では男性の方が、「人と腹を割って話し合うには、一緒に酒を飲むのが一番だ」「酒を飲めないと社会生活で不便なことが多い」など、社会生活でのアルコールの重要性を肯定する度合いが女性よりも高かったが、今回の調査ではこれらの質問について性別との関連性は見出されていない。43 年前と比べると日本経済全体が縮小局面に転じ、接待が減少したことや、外飲みが減少していること、そして一方で社会の中で働く女性が増えたこと等が影響していると考えられる。

日本においては「節度ある適度な飲酒」は個人の努力に委ねられている部分が多い。先進諸国の一部では、昼間に外で飲酒をすることを法律で禁じるなど、節度のない飲酒に対しては法的な制裁が加えられることがある。一方日本では、アルコールを販売する自動販売機は激減

したが、コンビニやスーパーでも手軽にアルコールを買うことが可能であり、また購入の際に、身分証明書を求められることは皆無である。本調査で、「20歳になるまで酒を飲むべきではない」に「大いに同感」していたのは30%程度であった。加えて、「酔ったかな」と思う程度に初めてお酒を飲んだ年齢については、回答者の38.7%が20歳前であった。これらのことから、大人が未成年の飲酒に対して厳格な態度を示しているとは言い難い。しかし、実際に「節度ある適度な飲酒」の枠から外れ、たとえば飲酒を背景にした事件が起きたり、アルコール依存症に陥ると、個人の要因のみが追及され責められることになる。

今回の調査では、過去に飲酒によりネガティブな経験をしたことがあるという回答者は少なかったが、周囲の人、具体的には父親や友人や職場の人が問題を起こしたことがあるという回答者は1割以上いた。他人のことはよく見えるものであり、飲酒を背景とした人間関係のこじれ、事故や事件は確実に生じていることを示している。実際、飲酒運転のニュースは変わらずに報告されている。「節度ある適度な飲酒」のために、地域社会の中にどのような仕組みが必要なのか、今後考えていく必要があるのではないだろうか。

V まとめ

本研究では、北九州市民の飲酒傾向やアルコールに対する認識、飲酒に対する許容度、飲酒による問題経験について明らかにすべく、アンケート調査を実施した。厳密な聞き取り調査を伴っているわけではなく、またあくまで市民の一部に尋ねているので、本研究結果をもって全北九州市民の飲酒動向を明らかにしているとは言えないが、一定の知見は得られたと考える。

全体的に健康上の理由から飲酒量が減ったという認識を抱いている人が多く、居酒屋や飲食店ではなく、家での飲酒の機会が増えていることが明らかになった。かつては社会生活でのアルコールの重要性を肯定する度合いがとくに男性の間で高かったが、現在ではそのような傾向も見られなくなっている。つまり、全体的に内向きの飲酒行動になりつつあると言えよう。

飲酒により過去にネガティブな経験をしたという回答者は少なかったが、父親や友人、あるいは職場・学校関係者が問題を起こしたことがあるという回答者は、それぞれ1割以上いたことや、飲酒状態で気が大きくなり、暴力をふるった経験も報告されていることから、「節度ある適度な飲酒」を逸脱すれば、さまざまな問題につながりかねないことが示された。「節度ある適度な飲酒」を維持する責任は現状ではもっぱら個人に課せられているが、未成年の飲酒や過剰飲酒を予防する仕組みづくりや雰囲気づくりが求められる。

(本学 地域戦略研究所 准教授)

〔注〕

- 1 福岡県介護支援専門員協会の常任理事である白木〔白木、2017〕は、ケアマネージャーにとって高齢者のアルコール依存症が身近な問題であることを指摘している。
- 2 厚生労働省の「国民健康・栄養調査報告」(2017)によると、生活習慣病のリスクを高める量を飲酒している者の割合は、男性14.7%、女性8.6%であり、平成22年から大きな増減

なく推移している。

〔参考文献〕

- 経済産業省（2018）「飲食関連産業の動向（FBI2017年—2017年までの推移(年単位)と近年の3つの特徴」2019年1月17日参照〈<http://www.meti.go.jp/statistics/toppage/report/minikeizai/pdf/h2amini110j.pdf>〉
- 厚生労働省（2017）「平成29年国民健康・栄養調査結果の概要」2019年1月17日参照〈<https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000351576.pdf>〉
- 清水新二、金 東洙、廣田真理（2004）「全国代表標本による日本人の飲酒実態とアルコール関連問題—健康日本21の実効性を目指して—」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』39(3), 189-206.
- 白木裕子（2017）「支援の現場からみえてきたこと —高齢者のアルコール問題—」2019年1月17日参照〈<http://www.ktq-kokoro.jp/lecture/4864>〉
- 内閣府（2015）『平成27年版高齢社会白書』
- 内閣府（2017）『平成29年版高齢社会白書』
- 法務総合研究所（2008）『平成20年版 犯罪白書』法務総合研究所
- 松井敏史（2013）「高齢者における飲酒コントロールと認知症予防」『認知神経科学』15(2),118.
- 余暇開発センター（1977）『現代社会における飲酒行動に関する研究』
- 和気浩三（2015）「高齢者のアルコール関連問題」『精神障害とリハビリテーション』19(2), 175-49.

STUDIES
OF
INSTITUTE FOR
REGIONAL STRATEGY
CONTENTS

Attitudes of the citizens of Kitakyushu toward drinking Hiroi FUKAYA 53

No.4
March 2019
INSTITUTE FOR REGIONAL, STRATEGY
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
KITAKYUSHU CITY, JAPAN